

海外語学研修実施の報告

—英国リーズ・メトロポリタン大学語学センター—

田 中 安 行

はじめに：

本学で学生の海外語学研修実施について具体的に考え始めたのは、1993年後半からであった。若くて感受性の強い学生時代に海外でその国の言語を学びながら生活をして、現地の人々とじかに交わり、その国の文化、歴史、風土その他さまざまなことを吸収、体験して学ぶことは、単に語学力の向上だけでなく、国際的感覚を身につけ、将来の生き方にも影響する大きな意味があり、本学の学生たちにもそういう機会を与えてやりたい、という目標によって始まった。

80年代後半以降、海外旅行は多くの人々が気軽に行ける旅行になってきた。しかし、保護者の立場からすると女子学生を独りか数人の友人だけで長期間、海外へ行かせるのはかなり心配である。教員など信頼できる引率者がつき、安心できるホストファミリーが見つかり、費用も妥当なもので、より安全性の高い国や地域で、研修内容も充実したものであれば、ぜひ行かせたいと思う保護者が多い。そのような要望を満たせるような語学研修に適する教育機関を探すことがまずはじめの段階の仕事となった。

その後94年度に海外語学研修検討委員会が作られ、候補教育機関の調査と選択を行い、95年3月末から4月初めにかけて候補地を実地調査して環境、スタッフ、カリキュラム内容、授業などの実際を見てきた。95年度8月には第1回海外語学研修に24名の学生が参加して感動のうちに無事終了した。96年度には教養教育科目の選択語学の1科目として2単位を習得できることとなり、23名が参加して8月に前回同様学生たちは多くの収穫を得て無事終えることができた。

ここに当初からの準備と現地との連絡、研修内容、参加学生のアンケートと分析、今後に向かった検討事項などの記録を整理して報告する。

I. 実施の検討と実施先決定および実地調査

A. 海外語学研修検討委員会——教育機関決定までの経過

94年度の5月に、学内に海外語学研修検討委員会が作られた。金子教務部長、八木学生部長、富永一般教育主任、阪本学生課長と英語担当教員として田中が担当した。まず、検討委員がそれぞれの角度から調査をして資料を集めて具体的に検討することになった。そして10月までに次のような機関と旅行社の資料が集められた。

ロチェスター工科大学 (アメリカ), カリフォルニア大学チコ校 (アメリカ)

ブリストル大学 (イギリス), リーズ・メトロポリタン大学 (イギリス)

オーストラリア関係, ニュージーランド関係, カナダ関係

検討した結果, オーストラリアとニュージーランドは, ほとんどの場合現地の語学学校が実施していて大学が行っている例が少なく, 大学生の語学研修内容としては不適切であること, 南半球のため, 暖かい時期を選ぶとすれば, 夏期休暇中は無理で, 冬休みではせいぜい2週間で充実した語学研修の期間としては不十分なこと, また春休みは本学の学事日程上からもやはりスケジュールをたてるのが困難であることがわかった。またカナダも大学が受け入れている場合が少なくて適当なものが見つからなかった。

アメリカとイギリスには大学が実施しているものがあり, 4週間程度の研修期間が確保できるので, その中から一つにしばることになった。そこでそれぞれ関係する旅行社と大学から旅行日程や大学での研修のシラバスなど詳しい資料を取り寄せて検討を行った。

その結果, キャンパスライフの安全性が高く, 静かに落ちついて勉強できる所として, ロチェスター工科大学とリーズ・メトロポリタン大学 (以下MLUと略す) が選ばれた。さらに研修期間中やその前後の旅行で, 文化, 歴史などが豊富で多くの風物に用意にアクセスできるメリットがあるということでリーズ・メトロポリタン大学を選び, 旅行社は近畿日本ツーリスト立川支店に依頼することにして, 95年1月15日の教授会に報告し決定した。研修内容については教務部が, 旅行と生活一般については学生部が担当することになった。

B. 現地調査の実施——海外語学研修旅行現地視察計画

1. 目的と日程:

- a. 現地のキャンパス, 施設, 春期コースの視察および語学研修実施内容等についての打ち合わせ
- b. 宿泊施設及びホームステイ先の視察とスタッフとの打ち合わせ
- c. 語学研修後の旅行先の視察と情報収集
- d. 平常時及び緊急時における対処・連絡方法等の確認
- e. 第1回海外語学研修引率予定者の田中が3月24日から4月1日まで, ロンドン, リーズ, ウィンダーミアなどの見学・視察を実施

2. 視察結果と提案事項:

a. 研修施設と内容

(1) BECKETT PARK CAMPUSはリーズ市の中心部から離れた所にあり, 広大な敷地を持ち, 教育学部, 法学部, 体育学部, 語学センターなどがある。図書館, 語学ラボラトリー, 各種スポーツ施設が整っていて, 登録した学生は利用できる。現在行われている春期コースは6~7名から最大で10名くらいのクラスである。フランス, スペイン, ドイツ, イタリアなどの学生が多く, 日本人学生もいた。

(2) テキストを元にして自由に考え, 発言させたり, ストーリーを暗記して友だちにそれを伝えさせたり工夫のある学習活動を行っていた。

(3) 本学の学生の専攻と特徴などを話して, より効果があがるようにいくつかの提言

をした。つまり少なくとも週1回は午後の時間にフィールドワークとして町へ出て見学したり、インタビューをしてその内容を次の時間にレポートさせるような活動である。本学の学生の専攻を考慮して、保育関係、福祉関係、心理相談、博物館学芸員、図書館員などの見学や、ボランティア活動への参加等、可能な活動を用意してもらって、学生が受け身でなく、積極的に日常の英語を使って身につけられる学習方法を考えてもらうことを提案した。このことについては所長のMrs. JonesもCoordinatorのMr. Killickも積極的に同意した。

(4) 研修参加者には最後の評価によって、a. 参加証明書 b. 資格証明書のいずれかを発行できる。

b. ホームステイ関連

(1) Home stayについては長い経験をもつPat女史が同行して1～2名を預かる一般的な家庭とアパート式に5～10名を預かっている家庭とを見学した。いずれの家庭も日本人学生を預かった経験があり、特に問題はなかったという。部屋の使い方や日常生活については日本人はとても評判がよく、英語については、初めはspeaking, listeningに苦労するようだが、reading, writingについては問題はないとのこと。

(2) どの家庭も学生に対して家族の一員のような感じで接しているが、ホームステイで問題がおこるのは誤解によるものがほとんどでセンターにはそれに対応するcoordinatorがいるので相談して解決している。

(3) ベッドメイキングと下着以外の洗濯、部屋の掃除、食事の用意などはすべて家庭でやってくれることになっている。

c. 平常時及び緊急時における対処・連絡方法等の確認

ロンドン及びリーズからはFAXを6通送信し、電話もリーズからかけてすべてリアルタイムで届いている。しかし、白梅側からの発信にはスタッフが英語でアクセスする際の問題があったようで改善が必要である。

d. 視察の評価：

(1) 短期間の視察ではあったが、実際に現地に行ってキャンパスを見学し、コースの実際の内容を見たり、打ち合わせや討論によって研修内容への実際的な提言もでき、家庭を訪ねて様子を知ることができたのは大変有益だった。

(2) 旅行については旅行会社に任せるにしても研修内容や研修、見学先については大学側として責任をもたなければならないので、今後も現地の責任者と直接連絡をとりながら内容を固めていく必要がある。

(3) 学生に対する説明や事前指導をおこなうに当たっても今回の現地視察は大変有効であった。

II. 第1回海外語学研修——1995年度

A. 参加者募集と事前研修

1. 参加者募集

実地調査から帰国するとすぐに検討委員会に報告、近畿日本ツーリスト立川支店と連絡をとって、第1回海外語学研修要項を作成して入学式に配布できるようにした。語学研修旅行

費用は1名49万8千円である。単なる観光旅行ではないので、現地に着いて安心して語学研修に参加できるように事前研修を行う必要がある。その内容は英国文化に関する基礎知識、生活に必要な英語、長期旅行および家庭滞在での諸注意などである。同時に旅行社からの手続きや手配についての説明も行う。募集受け付けや学生との対応など事務面は阪本学生課長が担当した。

2. 事前研修日程

- ・ 5月中旬以降、隔週火曜日の5限を使って6回行う。
- ・ 事前研修の目的：現地で必要になる英語を学習しながら英国の生活・文化的背景などを学ぶ。

- a. ホームステイの家族に自己紹介の手紙を書いてコンタクトをとる。
- b. イギリスの旅行・生活・習慣について具体的に知る。
- c. イギリスでの生活に必要な英語表現を学ぶ。
- d. 事前研修を通して見知らぬ国での生活の不安をなくし、自信をもつ。
- e. 事前にグループで一緒に学ぶことで、お互いを理解する。

4月以降MLUとはe-mailで頻繁に連絡をとって研修内容についての打ち合わせを行った。95年度の参加者は1年生が11名、2年生が12名、専攻科1名の合計24名だった。学科によって毎日5限まで授業がつまっていた、実習やゼミの集まりがあったりで、毎回の事前研修に全員が揃うのは困難だった。

旅行の時などの行動グループを作ってふだんからお互いを知り合えるようにし、定期試験期間中にグループ毎の面接を行った。顔合わせと現在の学生の抱く問題を聞いたり、コミュニケーションを図った。

学生からホストファミリーへの手紙は6月上旬にまとめて送った。それに対して何通かの返事が届き、事前研修の時に紹介されて、学生たちは相手を身近に感じ、しだいにイギリスへの旅が近づいた来るのを楽しみにし始めた。7月24日にホストファミリー・リストがe-mailで届けられたので、7月25日の最終の打ち合わせでリストを配布して学生たちもいよいよ実感をもって出発の日を迎えることになった。

B. 1995年度イギリス語学研修旅行記録より

AUG. 5 (土) 成田空港から学生24名と共に父母10数名と学校から金子、八木両部長と坂本課長に見送られて元気に出発。(14:22) 成田空港離陸⇒(16:13) <GMT> ロンドン・ヒースロー空港着陸。バスで市内のホテルに向かう。

★Hotel Russel 泊

6 (日) (09:05) ホテルからバスで OXFORD へ行く (10:20)。見学時間が少なく、近くの大学講堂や図書館などを見て、(11:30) 次のSTRATFORD-UPON-AVON へ行く (12:20)。シェイクスピアの生まれた町を歩きその生家を見学する。見学時間確保のために各自でサンドウィッチを買ってバスで走りながら食べる。LEEDS

- 到着 (16:30)。語学センター前で1人ずつMr Killickに名前を呼ばれて直ちに迎えの家族の車で別れて行った。いよいよ学生たちの英語の生活が始まった。
- 7 (月) (09:00) この日から授業開始, オリエンテーション, クラス分けテストと面接, キャンパスツアー, 昼休みにカフェテリアでみんなと顔を合わせてほっとする。それぞれの家族の様子などを聞きあう。数名がバスで帰りに降りる場所がわからない, 朝, 車で送ってもらったのでどうやって帰ったらよいか分からないと言うのでセンターでRachaelさんに調べてもらう。午後はスライドによるリーズ案内。学生は疲れと時差ぼけで居眠りが多いが無理もない。
- 8 (火) この日クラス分け発表, 9名, 9名, 6名の3クラスに分かれて, 授業開始。教員はMAX, PADDY, ANNEが担当。午前中90分授業を2コマ。3週間の勉強で各自が取り組むプロジェクトと最後に行う発表のことが説明された。午後は講話やスポーツ, 英国の大学生と交流。
- 9 (水) この日以降スケジュールはほぼ同じ, 田中は毎日教室で学習状況や健康状況を見たり, 休み時間や昼休み, 放課後に個々に学生と話して生活状況等を把握。日本への電話のかけ方や, ファミリーへのいろんなことの頼み方など英語に関する質問が多い。イギリス到着後はほぼ毎日, 近畿ツーリストにFAXまたは電話で学生や現地との状況を知らせて連絡をとる。この内容は即日白梅にも伝えられるように手配してある。
- 12 (土) 朝からバスでYORKへ遠足。ローマ時代に作られた古い城壁が町をぐるりと囲み, 町にはヨーク城の跡の博物館やバイキング博物館など見るものが多く, 何よりもヨーク・ミンスターという大寺院が見事である。1週目の土曜日で最初の週の緊張感から開放されて, 城壁の上を歩いたり, 博物館を見学したり, 午後は班単位での自由行動でヨークの歴史的な町並みを見ながらショッピングをしたりと, 学生たちはとても楽しんでいた。夕方にはYork Minsterに行ってその壮大な建築物を見て, 中に入るとステンドグラスの光の中でパイプオルガンを聞きながら人々がお祈りをしている様子を目の前に見て, 感動して涙を拭いている学生もいた。このようなイギリスの歴史や文化や人に直接ふれる体験はたいへん貴重だった。(18:00) キャンパスで解散。
- 13 (日) ~22 (火) この間は, 田中はイングランド南部のケント州, 東西サセックス州などに研修旅行に行った。この期間中ほぼ毎日The Language Centreのレイチェルと電話またはFAXで連絡をとり, 学生の状況を確認, 白梅学園短期大学に報告する。清宮亜紀子と初鹿千夏が毎日午前中にみんなの状況をレイチェルに報告するように依頼しておいた。
- 24 (木) 23日とこの日の放課後準備をして18:30から白梅主催のフェアウエル・パーティを開いた。ファミリーと世話になった先生達, センターのスタッフ, それに同宿のスペイン人学生たちも招待して約80名のにぎやかなパーティになった。班単位, クラス単位で余興や歌, ゲームなどを披露し, 学生の希望で最後に「仰げば尊し」を歌った。先生やファミリーの多くが感動して涙を流して聞いていた。司会もゲームの説明も自分たちで考えた英語で行い, この3週間の勉強で学生たちはコミュニケーションに対してたいへん積極的になり, 自信を持つようになった。

- 25 (金) 最後の授業。午後は英国の大学生との最後の交流。19:00からセンター主催のバーベキュー・パーティ。先生方や他国の留学生たちと最後の別れを惜しむ。夕方、にわか雨。リーズ到着以来、連日好天で英国では数十年ぶりの猛暑の夏だったが、特に病人も出ず元気に過ごした。
- 26 (土) (09:20) センター前からバスに乗る。ファミリーやスペイン人の学生たちが大勢見送りに来てくれて互いに抱擁し合って名残りを惜しみながら出発する。バスでリーズからWINDERMEREに行つて、ピーターラビットの舞台ヒル・トップに行きビアトリクス・ポターの家を訪ねる。帰りにワーズワースの学んだグラマースクールを見学。★The Old England Hotel泊。
- 27 (日) 午前、ワーズワースゆかりのライダル・マウントの家とダブ・コテージとセント・エドワード教会などを訪ねる。午後は班単位の自由行動。ポター博物館や市内見学をしたり、遊覧船で湖上を行く学生もいる。
- 28 (月) (08:30) ホテル発 → <バス> →PRESTON⇒国鉄のインター・シティでロンドンに戻り、夜はミュージカル”CATS”を見学に行く。
★Forum Hotel London泊
- 29 (火) (09:00) 小雨、バスでロンドン市内見学。午後自由行動。
(19:00) ホテルで最後の夕食をともにしながら反省会。
- 30 (水) (08:30) ホテル発。(13:45) ロンドン・ヒースロー空港離陸。
- 31 (木) ⇒成田空港着陸 (09:23+) チェックアウト、父母の方々と金子、八木両部長および坂本課長の出迎えを受けて全員元気で無事に27日間のイギリス語学研修旅行を終了して帰国した。(10:40) 解散。

C. 白梅祭での写真展示と文集制作

◆楽しく充実したこの語学研修の思い出を白梅祭で写真展示をして大学内外の人たちにも見てもらおう、ということで班毎に分担して準備をした。写真は各自から提供してもらって担当の班で整理して、見学者にわかるように工夫してパネルに貼る。

1. 出発からリーズ到着、ヨーク行きまで
2. 各ファミリーでの生活と2週目を中心に
3. LEEDS, YORKSHIRE DALE, スケート他
4. FAREWELL PARTY, 最後の日、家族と別れ
5. WINDERMERE旅行
6. LONDON旅行 (NG集など)

◆語学センターで撮ってくれたビデオと自分たちが後半の旅行で撮ったビデオも編集して見もらった。

◆文集を作成して参加者と大学に記録として残すことにし、それぞれが最も印象に残ったことや、イギリスで得たことについて自由に書いた。写真やイラストもつけて、その他に参加

者名とhost familyのリストや旅行と研修日程などを編集委員が作った。印刷製本係その他全員で完成させた。

D. 評価ならびに問題点等の検討

初年度の語学研修旅行を終えてその評価ならびに問題点等をまとめて教務、学生両部長と旅行社の関係者で検討会を行った。それらの結果はLMU語学センターにも知らせた。

学生の実態に合わないプログラムや施設の利用上の不便、プロジェクト学習の内容、方法の説明の不備などについては次年度の計画を立てる際の改善資料にした。

Ⅲ. 第2回海外語学研修——1996年度

A. 教養教育科目の選択語学の1科目として単位取得対象科目になる

95年度のLMUでの語学研修内容が充実していて本学の学生のレベルに合った適切なもので、単位取得科目とするに足りると認められ、カリキュラム委員会で選択語学の1科目として承認された。そこで96年度の参加者の募集は下記のようなシラバス内容で行われた。つまり、1年生は参加して所定の課程を学習し、一定の成績を収めれば2単位が取得出来ることになる。

<シラバスより>

[開講期]

1年前期に事前指導を行い、8月に英国Leeds Metropolitan UniversityのLanguage Centreにおいて英語研修を行う。

[授業目標]

イングランド中部のLeeds市でホームステイをして、英国の家庭生活を経験しながら、上記大学において3週間の英語研修に参加する。この間に土地の人々と交流しながら実際の英国文化に触れる。授業も受け身の学習でなく、interactiveな授業および街に出て見学や資料収集をしてレポートするなど現地でなければならない密度の濃い実地での英語研修を行う。

滞在中にexcursionで近隣の各地を訪れて、英国の文化、文学、歴史などの実態にも接することで、奥行きのある英語研修になる。なお、前期に数回、英語ならびに現地での生活・学習にとって必要な予備知識や旅行の準備などに関する事前指導を行うので、必ず参加すること。

(中 略)

[評価方法]

1. LMUでの研修は現地の教員が評価を行う。
2. 参加状況を記録し帰国後、1. と合わせて総合的に評価する。

なお、今年度は金子教務部長と富永教養教育主任とが担当することになり、教養教育の瀬尾さんが募集受け付けや学生との対応などを担当した。

科目の一つになったので、少しでも学生の負担を軽くしなければならない、という教養教育主任の意向を受けて、現地および旅行社と交渉して研修の質は下げないという条件でいくつかの可能性を検討した。その結果、日程を1日少なくして語学研修旅行費用を1名44万8千円にすることで決定した。

96年度の参加希望者は1年生が16名、2年生が7名、合計23名になった。そこで昨年度とほぼ同様の日程で事前研修のプログラムを作成して5月中旬から開始した。今年度も連日5限まで授業が入っていて、実習やゼミ関連で全員が揃える日は少なく、3回ほど同じ内容で別の日に学生を集めて補講の形で研修を埋め合わせなければならなかった。

B. ホストファミリーとの手紙の往復

今年は学生からの手紙は自分や家族の写真などを貼って書かせたところ、現地ではたいへん好評で、昨年の学生たちへの評判も良かったこともあって、ホストファミリーの申し出が早く行われ、ほぼ全員のホストファミリーから、6月下旬にはそれぞれの学生宛に返事が届いた。アドレス・リストも7月上旬に届いた。定期試験期間中に行ったグループ面接では昨年リーズで手に入れておいた市内の地図にそれぞれの学生の滞在先の印を付けさせた。これによって昨年よりも学生たちの不安を解消し、期待を高めるのに役に立った。

C. 1996 年度イギリス語学研修旅行記録より

AUG. 3 (土) 富永教養教育主任と土門教務課長に見送られて学生23名と成田空港から出発。(14:18)離陸 ⇒ (16:34) <GMT> ロンドン・ヒースロー空港着陸

★Forte Posthouse Heathrow Hotel 泊

4 (日) 快晴, 22度。東京の気温に比べるとぐっと低く湿度が低いので冷涼に感じる。全員元気に起床, 朝食に初めてのたっぷりとしたEnglish Breakfastを食べて満足そう。(09:00)ホテル発→ <バス> →NOTTINGHAM見学, 昼食をパブでとる→ (16:00)リーズ着。語学センターから3名の職員が出迎え, 学生と出迎えの家族を確認しながら預ける(16名は家族が出迎え, 7名はタクシーで家族のもとに送る)。(16:40)全員完了。

5 (月) 晴れ, 20度。長袖でセーターが欲しい気温。9:00にキャンパスに着く。この日から授業開始。2名遅刻。1名はメインキャンパスに間違えて行ったという。Diana主任の挨拶の後, クラス分けテスト。キャンパスツアー, 昼休みにカフェテリアでそれぞれ問題や困ったことはないかを尋ねる。午後は現地学生が各班に1名ずつ付き添ってリーズのCity Centreまでバスで行って案内をしてもらう。班によってコースは異なるが翌日からの生活に役立つ。夜は学生会館でInternational Studentsのためのディスコ・パーティ。半数ほどの学生が参加。

6 (火) 曇り後雨。18度。今日はほとんど全員が長袖にセーターやジャンパー姿。この日ク

ラス分け発表, 8名, 8名, 7名の3クラスに分かれて, 授業開始。教員はDAWN, MICHELLE, PHILIPPAが担当。午前90分授業を2コマ。午後はスポーツで, 体育館でバレーボールをする。途中から激しい集中豪雨となる。15:30に終わって学生11名と近くの郵便局に行き, バスの定期購入を手伝う。その後, 近くのスーパー・マーケットに案内する。今年度は午後は, スポーツの他にMuseum見学, Projectのための自主学習時間などのプログラムが組まれている。

- 7 (水) 雨。午後はあがり, 夕方晴れる。17度で昨年の猛暑はなく, 寒い感じである。この日から午前3クラスが2コマずつの授業で, 午後は各種のスケジュール。田中は毎朝教室で学習状況を見学したり, 休み時間や昼休みと放課後に学生と会って生活状況を把握する。昨年より学生は早く生活に適應している。午後は近くのAbbey House Museumを見学に行く。歩いて40分以上かかる。20世紀初頭のヨークシャの生活を展示してある。その向かい側に15世紀頃に建てられたAbbey House僧院の廃虚があって見学してから市内へ戻った。
- 8 (木) 朝曇り後晴れ。20度。天気図だと次第に晴れて暖くなりそう。午前のクラスでプロジェクトについての解説がある。昨年は学生に徹底していなかったもので, 今年は各クラスで補足説明をした。2人で組んでテーマを決めて, インタビューをしたり, 資料を集めてその結果を分析して結論を書き, 2,000語のレポートにして第3週に提出するというものである。昨年は個人で行って300~700語のレポートが多かった。A4版で手書き約10枚になる。午後はバスでBRADFORDへ行ってスケートをする。その後, カメラ・ビデオ博物館と劇場を見学する。
- 9 (金) 曇り後晴れ。朝, もやがかって後に晴れてくるというイギリスらしい天候。21度。午後はSelf Study Workの第1回である。14時に学生はクラスに集まって各自のプロジェクトのテーマに沿ってどういう方法で調査をするかを話し合い, 終わったグループから帰宅した。どのペアも大変熱心である。
- 10 (土) 朝は土砂降りの雨。バスでYORKへ遠足。着いた頃雨は止み, 青空が広がる。ローマ時代に造られた壁の上を歩き, York Castle Museumを見学してから, 昼食を取って班単位で自由行動。ヴァイキング博物館や市内見学をしてヨーク・ミンスター(大寺院)に17:30に集合。バスでリーズに戻りキャンパスで解散。学生たちはヨークが気に入る, 後日もう一度訪ねたグループもあった。
- 11 (日) ~17 (土) この1週間は晴天が続き, 気温も25~32度になる日が多かった。田中はイングランド南西部のグロースター州, ドーセット州, デヴォン州, コーンウォール州などに研修旅行をする。この間ほぼ毎日語学センターのRachelや学生に電話またはFAXで連絡をとり, 学生の状況を確認, 白梅学園短期大学に報告する。学生の方は三浦幸江と大澤睦美がみんなの状況を毎日レイチェルに報告してくれた。
- 18 (日) 快晴。30度。絶好の遠足日和。朝9:30に集合。松崎彩が来なくて10:00まで待つがついに出発。すると裏門の下のバス停で外国人学生ら3人が乗り込んできて, その中に松崎もいた。12:30にWINDERMEREに到着。18:00まで自由行動。センターの計画ではウインダミアはレクリエーションのつもりで, WordsworthやBeatrix Potterなどに関する見学は入っていなかった。残念である。グループ行動で, ライダル・マウントへWordsworthの家を訪ねたもの, ヒル・トップへPotterの家を訪

ねたもの、湖でボートを漕いで過ごしたもの、町を歩き回ったものなどがあった。
20:30キャンパスに戻って解散。

- 19 (月) 快晴で34度になる。今週はヒアリング・テストやプロジェクトの1次原稿提出が始まり、学生もあわただしくなる。午後はプロジェクトの進行状況を聞き、白梅Good-bye Partyへの招待状の分担などを決める。その後、プロジェクトの原稿書きなどで一部の学生は18:00まで教室で勉強していた。

- 20 (火) 晴れ、午後にわか雨。28度。久しぶりの雨である。9:30にChurch Wood Ave. に集まってDawnのクラスとLeeds Nursery Schoolへ見学に行く。3カ月の乳幼児から、4歳児まで約100名を預かっている。私立の保育園で、園長が案内してくれる。庭で遊んでいる年長組と学生たちがいっしょに遊んだり、歌やゲームをして、その間にプロジェクトの質問を職員にしている学生もあった。午後は白梅パーティの相談をして、グループ毎に練習と準備を始める。

- 21 (水) 夜は激しい雨。朝、hazyでしだいに晴れる。24度。各クラスでスピーキング・テストが行われている。録音して結果と共に評価委員会に回して複数の教員によって評価を確定するのだという。

David Killick氏とこの大学と白梅学園短期大学との間での語学研修についての協定事項を正式文書にする件を話し合う。〈資料1〉評価についても細目を話し合い合意を得た。その他今回の研修について気付いたことをいくつか述べておいた。

(13:30) バスでHAWORTHへ行く。ブロンテ姉妹の博物館を見学して、Albert氏の案内で嵐が丘への道を少し歩く。時間が足りなくて、途中までだったがheatherの咲き乱れるMoorの景観の一端に触れることができた。

19:00からバーベキュー・パーティ、途中にわか雨となり、International Studentsのコンサートを始めた。各国の学生が余興や歌や音楽を披露、白梅の学生たちも飛び入りで歌を歌った。近畿ツーリストの小沢氏が到着。

- 22 (木) 晴れ、夕方から雨。22度。涼しくなる。火曜日とこの日の放課後準備をして19:30から白梅主催のグッドバイ・パーティを開く。ファミリーと世話になった先生達、センターのスタッフたちを招待して約60名のにぎやかなパーティとなった。班やクラス単位で余興や歌、ゲームを披露した。先生たちを登場させるOHPを使った影絵や二人羽織など、会場を湧かせた。司会もゲームの説明も英語で行い、語学研修で学生はコミュニケーションに対して積極的になり、自信を持つようになったのがよくわかる。22:00終了。学生はその後Dawn先生とCity Centreのディスコへ行く。

- 23 (金) 朝、小雨。後晴れ、夕方雷雨。24度。典型的な英国式天候。最後の授業はビデオを見るクラスと、まだプロジェクトが終わらずにやっている学生もいた。最後に全員が一つのクラスに集まってみんなで英語のゲームと歌を歌っておおいに盛り上がり別れた。担当の先生たちに一言ずつ書いてもらうために長い列ができていつまでも別れを惜しむ場面が印象的だった。学生たちも荷物の準備があるので14:00くらいには帰宅した。センターの職員に挨拶をしてキャンパスを去った。

- 24 (土) にわか雨。曇り後晴れ。24度。(09:15) 語学センター前からバスに乗る。ファミリーやセンター職員が大勢見送りに来てくれて互いに抱き合って別れを惜しみなが

ら出発する。送ってきてバスが出るときには大声で泣き出す子どもたちもいた。学生たちにとっても心に残る滞在ができたことを感じた。

＜バス＞→STRATFORD-UPON-AVON見学（シェイクスピアの生家を訪ね、市内を見物しながら、シェイクスピア劇場を経て彼の墓のあるトリニティ・チャーチまで歩く）→OXFORD見学→（19：10）LONDON着 ★Great Western Hotel 泊

- 25（日）朝にわか雨。後快晴となる。22度。明け方の3：50に火災警報で目が覚める。フロントに聞くと間違いとわかる。学生の各部屋に心配ないことを連絡。何名かは1回ロビーに集まっていた。間違いでよかった。本当の火災だったら、今までせっかくの無事故が台無しである。最後まで油断はできない。

バスでロンドン市内見学（ハイド・パーク→シティ→ロンドン塔→ウェストミンスター→ケンジントン宮殿→バッキンガム宮殿→ピカデリー→ナショナル・ギャラリー→ブリティッシュ・ミュージアム（18：00）夜はお別れディナー・パーティでそれぞれの体験を交流する。

- 26（月）快晴。昼にわか雨。後晴れ。22度。朝から班単位で自由行動。ショッピングや博物館などさまざまである。夕方バスでThe New London Theatreに行つてミュージカル“CATS”を鑑賞。（23：00）解散。

- 27（火）快晴，22度。（10：00）ホテル発。（14：45）ロンドン・ヒースロー空港離陸。

- 28（水）⇒（09：14⁺）成田空港に無事に着陸。ほっとする。チェックアウト，全員無事故で病人もなく無事に帰国できて嬉しい。（11：10）教養科中島助教授や学生の家族の出迎えを受けて点呼後解散。

D. 事後指導と整理，問題点の検討

今年度も帰国後学生たちが白梅祭に写真展示とビデオ上映を行って一般学生や外部の人たちに報告会を行った。11月初旬には富永教養教育主任，英語科の中島助教授，近畿ツーリスト，ACOSTAの関係者と今年度の反省を行い，問題点や検討課題を討議して次年度への引き継ぎを行った。

また96年度も，リーズでの生活を記念する記録文集を作成して大学に残し，またリーズの先生たちにも送った。

IV. 語学研修旅行のアンケートから

各年度ともリーズの研修を終えてロンドンに帰る途中のまだ印象の新鮮な旅行中に，リーズでの語学研修に関して次のような内容でアンケートを行った（96年度用を示す）。

4. のACTIVITIESの内容がいくらか変わった点を除いて，分野も項目も初年度と同じ内容にした。いくつか内容の変わったものについては変更した項目もある。そして95年度と96年度のアンケートの結果を比較する下記のようなグラフを作成してみた。

なお，参加者数は95年度が24名，96年度が23名と1名であるが異なっているのでそれぞれ平均値を出してグラフを作成した。

現地で観察したことを参考にして、これらのグラフから読みとれることについて各項目の後ろにコメントを付けておく。

A. QUESTIONNAIRES

(25. August, 1996)

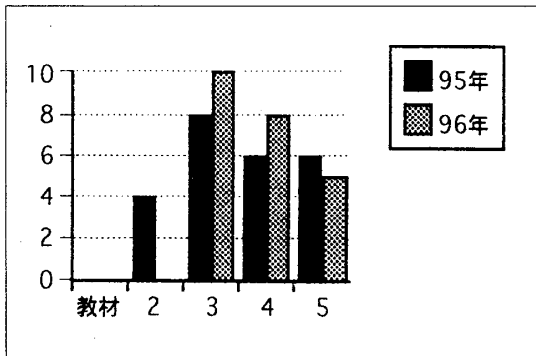
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
1. 語学研修	よくない		ふつう		よい
a. テキストや教材は	0	0	11	8	4
b. 練習やペアワークは	0	0	3	8	12
c. 先生の教え方は	0	0	0	1	22
d. 自分にとってレベルは	0	1	3	4	15
e. 全体として	0	0	1	5	17
	0	1	18	22	70
2. HOME STAYは					
a. 家族は	0	2	2	3	16
b. 部屋は	0	2	1	3	17
c. バス・トイレは	0	3	3	6	11
d. 話す機会は	2	4	4	4	9
e. 食事は	1	2	6	4	10
f. 生活全体は	0	1	4	7	11
	3	14	20	27	74
3. LEEDSでの生活					
a. 通学	2	1	3	5	12
b. 日常の買い物	0	2	4	9	8
c. ショッピング	0	3	4	10	6
d. 友達との付き合い	0	0	4	3	16
e. 日本の家族との連絡	0	0	11	5	7
	2	6	26	32	49
4. ACTIVITIES					
a. 1日目のtown tour	0	2	3	7	11
b. Yorkへの遠足	0	0	3	1	19
c. Windermereへの遠足	2	0	2	3	16
d. Haworthへの遠足	1	1	7	6	6
e. Nursery school見学	0	1	4	2	16
	3	4	19	19	68
5. Projectは自分にとって意味があったか					
	0	2	7	8	6

B. イギリス語学研修学生回答の95年度と96年度の比較とコメント

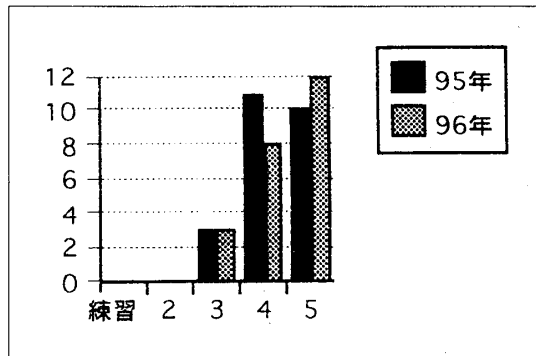
[1] 評価項目別の比較

1. 語学研修:

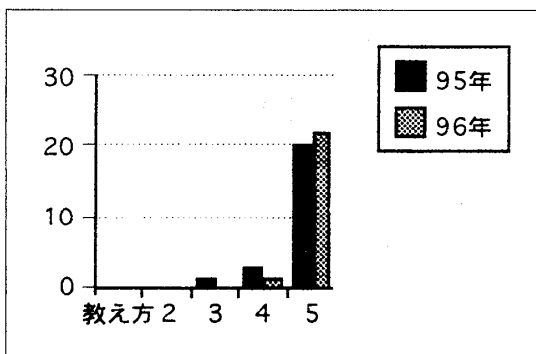
a. 教材・テキスト



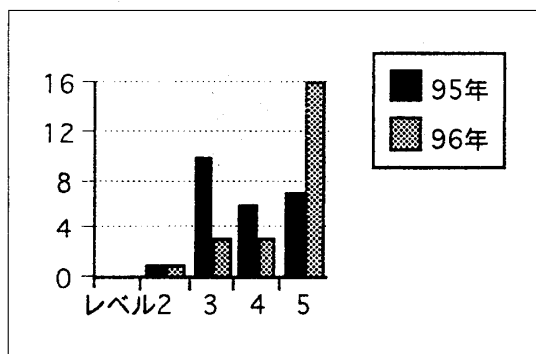
b. 練習やペアワーク



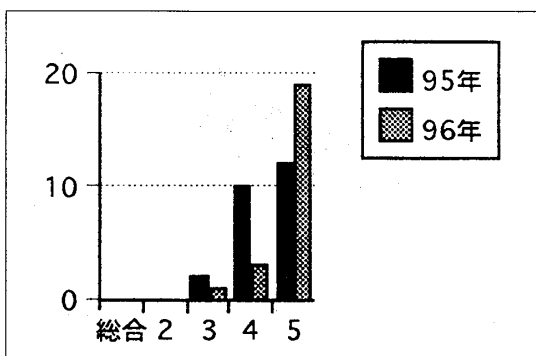
c. 教え方



d. レベル



e. 全体として



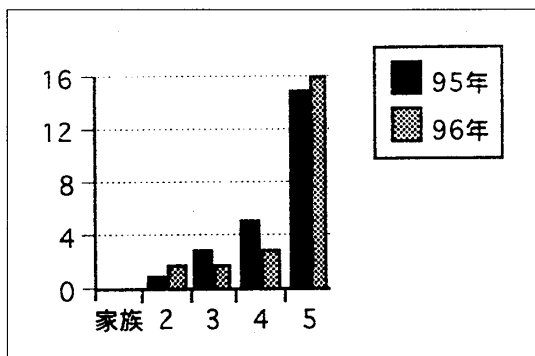
◆コメント：語学研修

教材・テキストはほぼ適当だと考えられている。両年度とも教科書は配布されたが、それよりも毎日教師が作成するコピー教材を使用して、学生の毎日の生活状況に合うテキストを使用することが多かった。

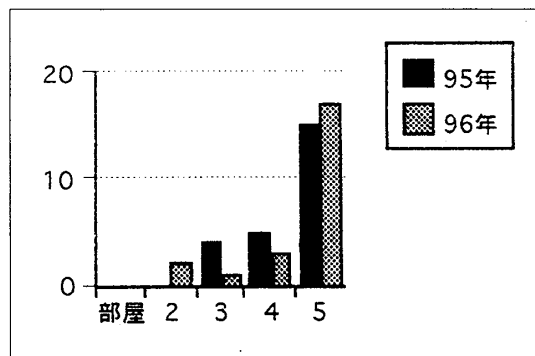
これらの教材を軸にして練習やペアワークを行うので、学生のレベルにも合っていて理解し易く、教師の工夫した教え方に好感を抱き、全体としての語学研修への好感度が非常に高くなったものと考えられる。

2. Home stay

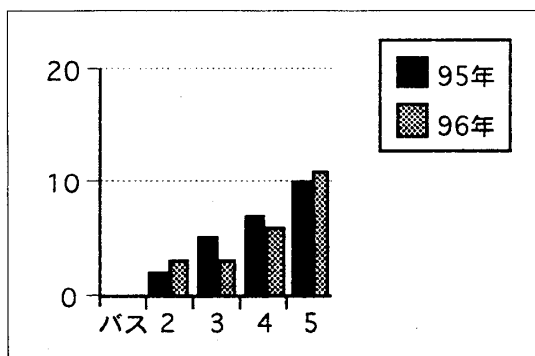
a. 家族



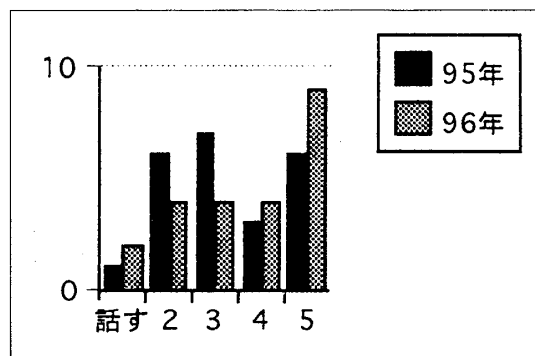
b. 部屋



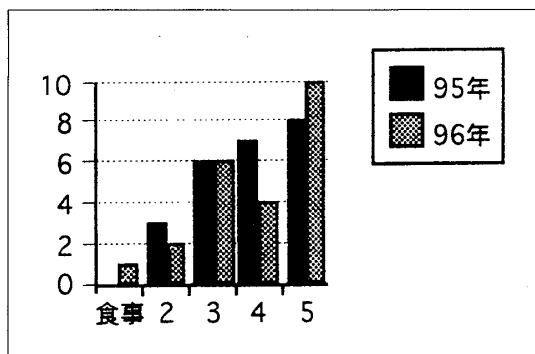
c. バス・トイレ



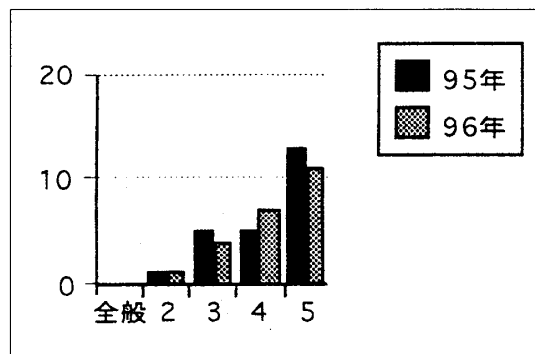
d. 話す機会



e. 食事



f. 生活全体



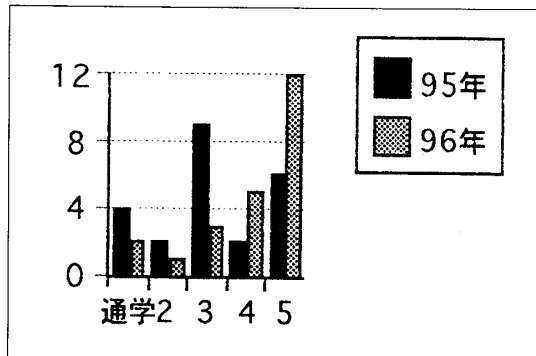
◆コメント：HOME STAY

ホームステイについては全体として家族がとても親切だった。白梅の学生は昨年以来、評判がよい。礼儀正しく、部屋の使用状況もきちんとしていて、洗濯もよく自分でしていた。そういう先輩の残したよい点が伝わっていて、どのファミリーでも日本人学生に対して好感を持って接してくれていた。部屋の満足度はかなり高かった。バス・トイレは習慣の違いからシャワーが使いにくかったり、毎日使うのに気兼ねをしたりした者もいた。

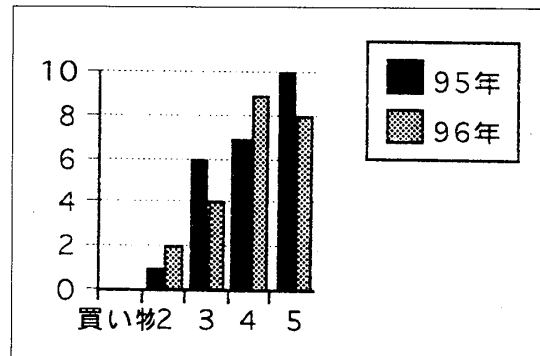
話す機会が他の項目に対して2, 3, 4の評価に分かれているのは、予習に時間をとられたり、学生の方から進んで会話に加われなかったこともあるが、家族の中には夕方から仕事などで出かけて会えない場合もあったようである。

3. Leedsでの生活：

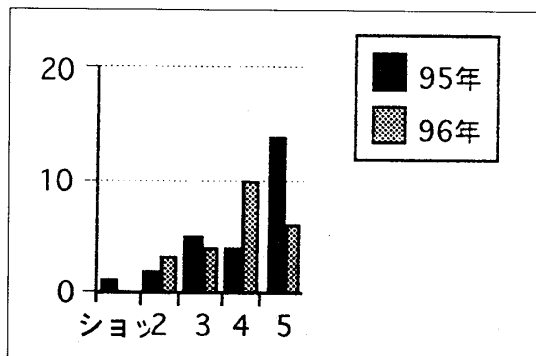
a. 通学



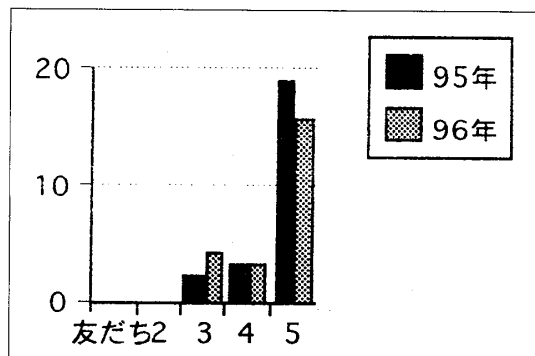
b. 日常の買い物



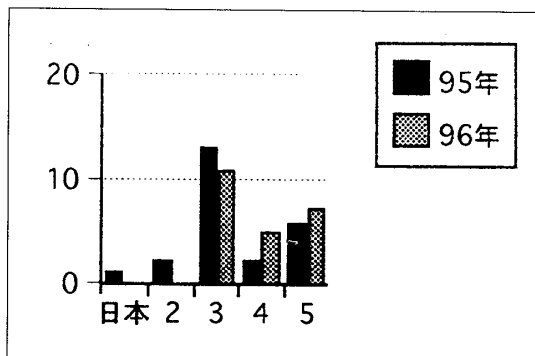
c. ショッピング



d. 友だちとのつき合い



e. 日本の家族との連絡



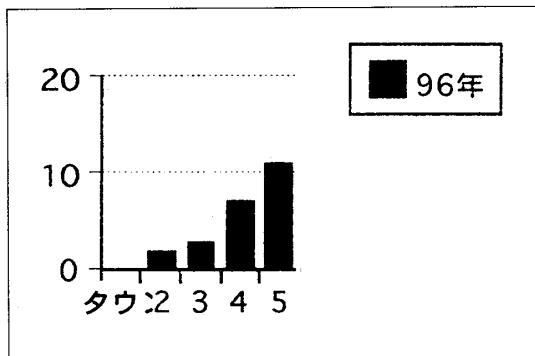
◆コメント：LEEDSでの生活

95年度は家がキャンパスからかなり遠いところが多く、バスも2回乗り換える学生も数名いた。今年度は大部分がかなり近い距離になったので、通学での満足度は高くなっている。プロジェクトがかなり大きな比重をもって課されたので、学生はふだんの日もその資料集めや分析に時間をとられて、昨年と比べると自由にショッピングに行ったり、放課後友達と交際したりする時間が少なくなったようである。

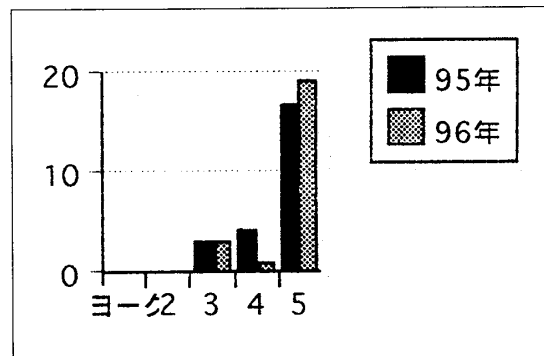
日本の家族との連絡は昨年同様、あまり頻繁には取っていない者が多い。これは電話代がかかることもあるが、現地での生活が充実していて、ホームシックになったり、淋しくなったりすることが少なかったことにもよるようである。

4. 遠足・見学などのactivities:

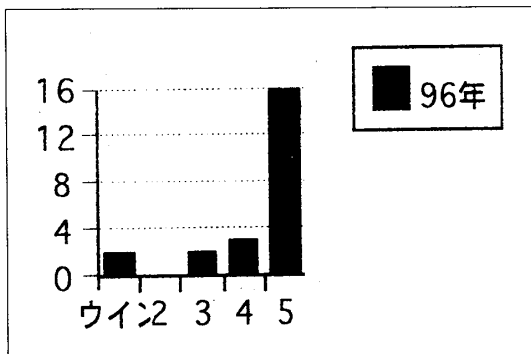
a. 1日目のtown tour



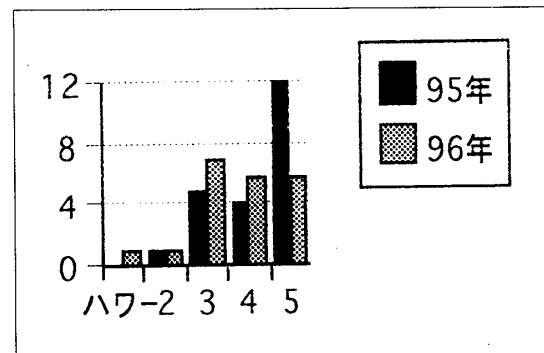
b. Yorkへの遠足



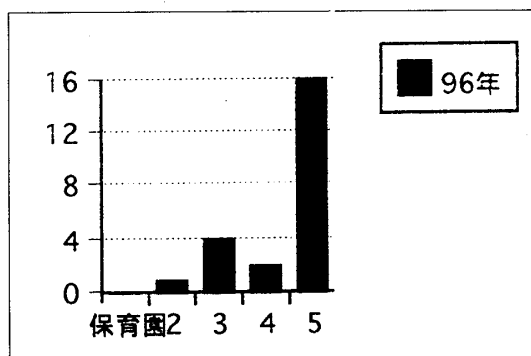
c. Windermereへの遠足



d. Haworthへの遠足



e. 保育園見学



◆コメント：ACTIVITIES

今年度第1日目の現地の学生たちのガイドによるグループ毎のタウンツアーは、リーズの町を知るのにとても役だった。

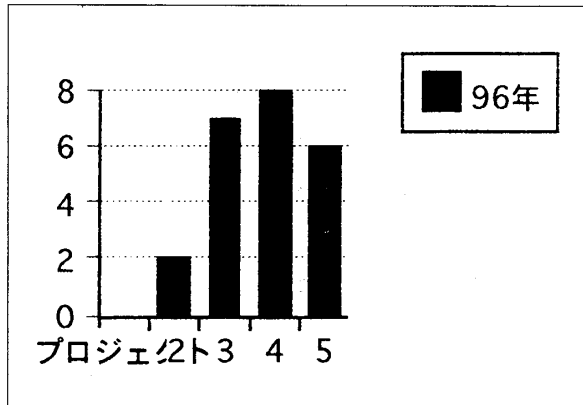
1週間目の土曜日に行ったヨークの町への遠足は、昨年同様天気も良く、ローマ時代からの長い歴史をもつ町並みを見ることができる初めての遠足で、博物館や大聖堂を見学したり、町で食事やショッピングを楽しむこともできて、きわめて満足度の高いものになった。

ウインダーミアへの遠足は、昨年のような文化・歴史・文学に触れるような企画が大学側によってされていなかったし、現地でバスが使えるようになっていなかったため、多くの場所を見学させることができなかったのは残念であった。しかし、グループ毎に自分たちで見たいところ、したいことをして1日を楽しく過ごせたことで学生たちは満足したものが多かった。

ハワース見学は今年は、夕方外国人学生とのインターナショナル・バーベキューパーティが予定されていたため、昨年よりも時間が少なくあわただしい見学になってしまった。

昨年出来なかった保育園見学が実現できて、保育科だけでなく、学生たちは現地の可愛い幼児たちと遊んだり、施設を見学したり、日英の比較もできて、大変満足していた。

5. Projectの自分にとっての意味は？

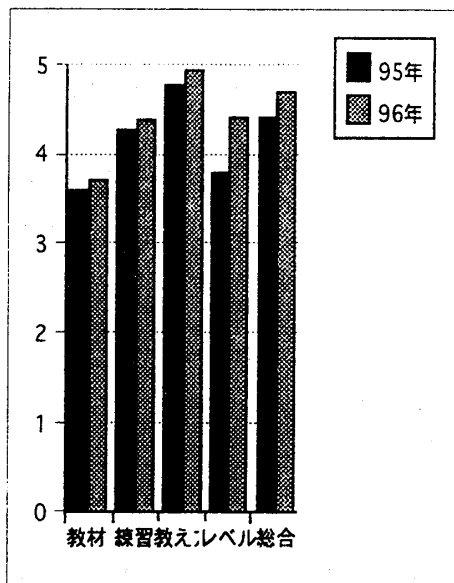


◆コメント：Project

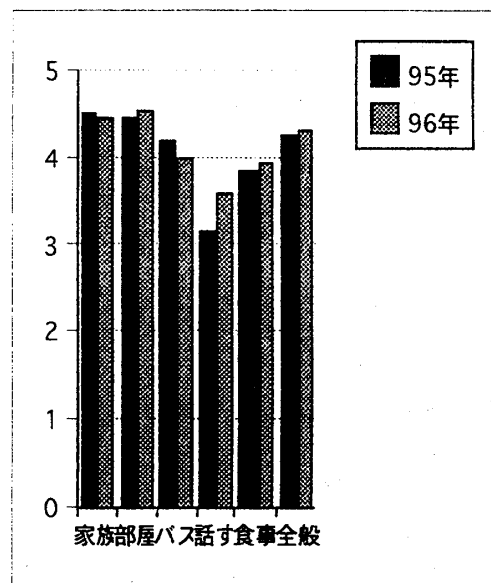
プロジェクトは教室で説明があつてから、提出まで実質的には10日間ほどしかなかったの
で、学生たちにとっては忙しく、3, 4, 5と評価は分散している。しかしA4版の原稿を
10枚、全部英文で書き上げるのはかなりの努力と英語力も要求された。プロジェクトについ
てはあくまで学生たちが自分の力でやりとげることが必要なので、田中は研究や調査方法の
相談には応じたが、英文の添削や指導は行わなかった。学生たちが書き上げた作品は力作が
多かった。

[2] 分野別の平均値による95年度と96年度の比較

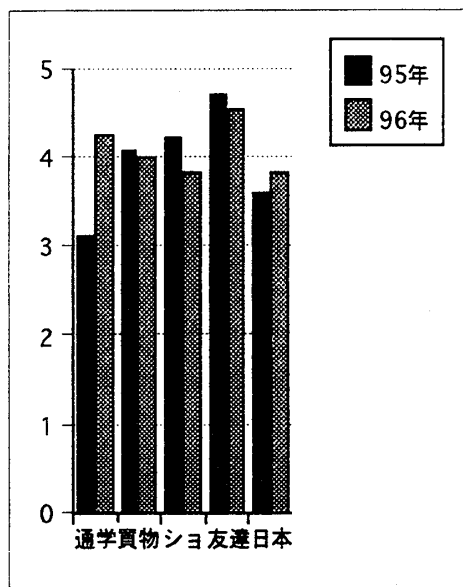
1. 語学研修



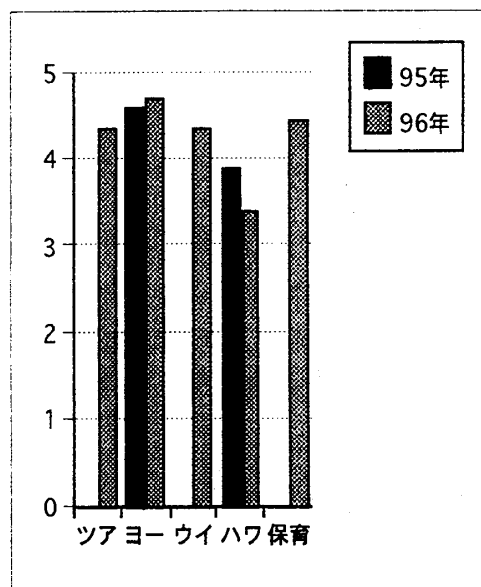
2. Home stay



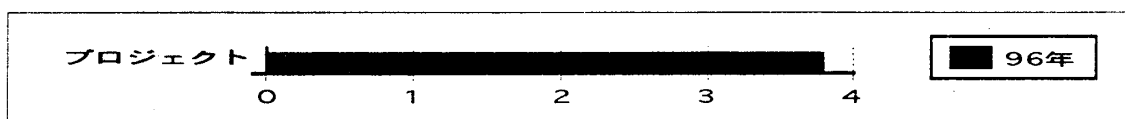
3. Leedsでの生活



4. 遠足・見学など



5. プロジェクトの自分にとっての意味は？



◆コメント：分野別の平均値グラフ

95年度と96年度の項目別の平均値の比較で見ると、それぞれの数値はあまり大きな違いはないが、全体的に96年度が若干上回っていることがわかる。特に語学研修についてはすべての項目が上昇している。内容、方法など初年度の検討の上で改善されたものだったからだろうと考えられる。

次に各分野の中での項目間の違いを見てみよう。

1. 語学研修：

この中では先生の教え方および研修全体の総合が兩年度とも圧倒的に高い評価を得ている。これは先生たちがいつも学生に愛情を持って接して、学生たちの学力を考えながら、少しずつ自信を持って力を伸ばしていけるように、毎日教材を作り、方法を工夫しながら授業を進めていたことによると思う。休憩時間のコーヒータ임には教材を交換したり、学生の状況を話し合っているのを何度も目にした。

2. Home Stay：

家族の親切さ、優しさと並んで部屋の快適度、ホームステイ全般が高い評価を得ていることが分かる。バス・トイレや食事については当たりはずれがあり、話す機会については上にも述べたように、家族の仕事や学生の勉強 時間などの関係で必ずしも全員がうまくいったとは言えない事情があったようである。

3. Leedsでの生活：

この分野では買い物、ショッピング、友達づきあいなどの項目は昨年度の方が上回ってい

る。上に述べたように昨年は単位取得という枠がなかったことで全体としてリラックスして生活を楽しむことができたようである。特に友達とのつき合いではスペインからの学生と同宿の者が多く、彼らと国際的な友情を深めた学生もいた。

また兩年度とも白梅の学生同士でも普段の学校生活では巡り会えないような、他の学科の学生、1年生、2年生、専攻科の学生が旅行中のグループや現地のクラスや宿泊でのペアなどで絶えず入り交じって交流する機会が多かったので、全体が一つの家族のような感じで、異国での生活を乗り切っていたことから来る連帯感も生まれていた。学生たちは「もう一度全員同じメンバーでイギリスへ行きたい」とよく話していたほどである。

4. 遠足・見学など：

これは昨年と行き先も条件もいくつか変わっているのですが、単純な比較はできないが、ヨークは兩年度ともに上述のように学生たちに大変喜ばれた。

5. プロジェクトの自分にとっての意味は？

これは昨年度はアンケートを採らなかったのが96年度だけのグラフであるが、平均値は3.7である。個々の回答数で見ると、(よい) 6名、(かなりよい) 8名で合計14名は高い評価をしている。(ふつう) 7名、(かなりよくない) 2名となっている。

プロジェクト課題の発表が8月8日－9日に行われ、それぞれのテーマ決定が12日、第1次原稿提出が19日、内容や方法上の指導を受けて、最終締め切りが21日－22日という日程だったため、学生は短期間に調査、インタビューなどによる資料収集、研究と分析、提出用の英文を書くことに追われることになった。そういう忙しさから毎日の生活を楽しむ余裕も少なくなって中にはこれさえなければいいのに、とため息をつく学生もいた。

しかし、＜資料2＞に示すように学生たちはそれぞれ工夫してテーマを見つけてかなり内容のあるプロジェクトを完成させた。特に英文で10枚ものレポートを短期間の間に仕上げるという経験は、日本ではなかなか得られない貴重なものである。これは今回の語学研修の英語力と英語での思考力を高める大きな試練になったと考えられる。

V. おわりに：

1. 学生がみなとても気持ちよく協力的でわがままを言ったり、勝手な行動をする者もなかった。事前研修で作ったグループがよく機能して日常の行動やコミュニケーション、遠足などでの集合、解散などにもいつもよくまとまって、機敏に行動できた。全日程にわたり、病気、けが、事故もなく、楽しく充実して無事に終了できたのも、そういうよい人間関係があったからだと思う。

2. 上記のグループ分けに加えて、現地でのクラス分けとプロジェクトのためのペア学習作業などで、つねに学科、学年を超えての交流が行われていたので、参加者全員がいつもお互いに交わり、一体感をもって生活や行動をすることになった。このことも全体の人間関係を緊密なものにしていった。

3. 語学センターの先生達は年度毎に入れ替わったが、いずれもたいへん親切で学生に愛情を持ってよく工夫して教えてくれたので、学生も授業が楽しく、日毎に積極的になって毎日学校に来るのを楽しみにしていた。

4. 受け入れ家庭は家族構成、職業、部屋の状況、食事の内容など、千差万別で、ホスト

ファミリーに当たりはずれは付き物であるが、学生は特に不平を言うものもなくよく適応して生活していた。95年度は白梅の学生の他にスペイン、イタリア、ドイツ、ポーランド、ボスニアなどからの学生が、96年度は韓国、タイ、香港、ブラジル、スペイン、イタリア、岡山商科大学などからの学生が来ていて、それぞれ総勢100名以上を同じ地域で受け入れているので、大学側としてもたいへんなことで、ある程度の格差はやむを得ない面もある。

5. 上述の他国の学生との交流も学生にとってはコミュニケーションの機会と視野を広げるきっかけになった。そして彼らから多くの影響を受けて、積極的になり、自信をもつようになった。96年春休みに友人を訪ねて独りでスペインまで旅行してきた学生もいた。

6. ホームシックもなく、帰国の頃はもっといたい、また来たいというものが多かった。96年春休みに友達と英国を再訪した学生もいた。

7. 2年間に互って学生を引率指導して全員無事に所期の成果を上げることができたことは何より嬉しいことであつた。これはすべて白梅学園短期大学とリーズ・メトロポリタン大学語学センターとの緊密な連絡と協力、サポートのおかげだと感謝している。

特に2年目からは単位取得科目になって教養教育課程の全面的な支援を受けることが出来て、準備、計画などや検討などの打ち合わせが開かれたことは引率責任者としてたいへん心強かつた。

事前指導を行い、それぞれ約1カ月間1人で海外へ学生を引率していくことは精神的にも、身体的にもかなり大きな負担ではあつたが、学生たちが現地で日毎に成長していく姿を見てみるとそういう苦労は吹き飛ぶ思いであつた。

8. 今後もこの海外語学研修がますます盛んにさらに大きな成果を上げて継続していくことを願いつつ、この記録と報告の筆をおくことにする。



ヨーク市壁を歩く (1996年8月10日)

<資料 1>



LEEDS METROPOLITAN UNIVERSITY

Letter of Agreement
between
Centre for Language Study, Leeds Metropolitan University
&
Shiraume Gakuen College

English Language & Culture Programme

This sets out the general arrangements for students of Shiraume Gakuen College attending this programme at Centre for Language Study, Leeds Metropolitan University.

Students will be assessed for their language competence by Centre for Language Study staff, and will then be placed into class according to their ability. Classes will be organised into levels corresponding to appropriate approved modules of the **Leeds Language Programme (LLP)**, a scheme of language awards approved and validated by Leeds Metropolitan University.

Students will undertake one module of LLP, equivalent to 90 study hours, and comprising 12 Credit points of this University. The 90 learning hours will consist of a combination of tutor contact hours and guided learning time. Guided learning will take the form of independent study in the self-access centre, University library, etc., and group study projects.

The curriculum for LLP is laid down in the Programme document, and the entire programme is subject to the University's quality assurance mechanisms, including annual and periodic review by the Academic Quality & Development Committee of the Centre for Language Study and of the University.

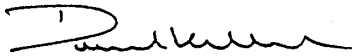
Assessment criteria for each module are based upon language proficiency descriptors of the English Speaking Union. All students will undertake module assessment in line with LLP regulations, and will be subject to ratification by the LLP Examinations Board. Successful students will be awarded Leeds Metropolitan University Credits.

In addition to the above assessment and credit rating, the Centre for Language Study will provide a report on the performance of each student as the basis for credit awards by Shiraume College.

We are very pleased to be cooperating on this venture, which we know will be of great importance to participating students, both in developing their linguistic skills and in broadening their international understanding.

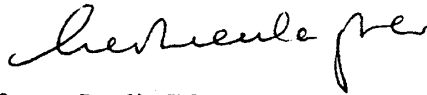
Signed

Dated



23.8.96

Mr David Killick
Head Quality, Development & Research Strategy
Centre for Language Study, Leeds Metropolitan University



11/8/96

Professor Leslie Wagner
Vice-Chancellor
Leeds Metropolitan University



27.9.96

Professor Tetsuo Ishii
President
Shiaume Gakuen College

<資料 2> The Titles of the Student Projects Written at LMU '96

1. COMPARISON OF ENGLISH LIFE AND JAPANESE LIFE by Reiko Hagiwara & Rie Kurokawa
2. TEA by Miho Okita & Chikako Koriyama
3. ENGLISH FOODS AND TEA by Kazuko Ikeda, Makiko Ono & Chizuru Kinoshita
4. BRITISH NATIONAL HOLIDAYS by Tomoko Gomi & Yoko Tsukamoto
5. THE BRITISH PUB by Eriko Iwata & Asuka Ohashi
6. GUIDE TO SHOPS AND PLACES OF INTEREST by Mio Kaneda & Rika Matsuzaki
7. ENGLISH HOUSES by Tomoko Sugata & Noriko Kato
8. FOOD & DRINK by Ryoko Hirayama & Yuka Osakabe
9. JAPANESE AND ENGLISH NURSERIES by Yuka Osakabe & Yukie Miura
10. BRITISH HOUSING: IN LEEDS by Aya Matsuzaki & Atsuko Sekiguchi
11. CHILDREN'S PICTURE BOOKS by Oka Kumiko & Naomi Hirano

たなか やすゆき (英語教育学・英文学)



リーズ保育園で園児や保母たちと交流 (1996年 8月20日)